日本肢体不自由児療護施設連絡協議会

令和６年３月

日肢療連 第１９号

日本肢体不自由児療護施設連絡協議会　発行

(福)ねむの木福祉会 ねむの木学園
編集者　やさしいお家　野田栄次
静岡県掛川市上垂木 2979-1

第 23 回全国大会「山口大会」2023年10月26･27日

こども家庭庁 岡﨑 俊彦氏による基調講演　　第一分科会と第二分科会の様子

「日肢療連のはじまり」

日本肢体不自由児療護施設連絡協議会は、北海道白糠学園、神奈川県精陽学園、静岡県ねむの木学園、大阪府立太子学園、山口県立華の浦学園、鳥取県立皆生療護園、長崎県立コロニーの七施設が集まり、平成8年１月８日に結成されました。

当時、旧児童福祉法の施設種別である肢体不自由児療護施設は、全国的にも数が少なく、他施設との交流はほとんどありませんでした。時代のニーズも少子高齢化が始まり、障害の重度重複化、被虐待児童の増加等、入所理由も多様化していました。一人ひとりの肢体不自由児の命と生活を守り、療育を目的とする施設の今後のあるべき姿、方向性を協議会の活動を通じて明らかにしていき、施設間の連携を強めていくことを目的としました。

・日肢療連は、今年１月で28周年を迎えました。
・令和年3月31日、白糠学園（設置者・社会福祉法人北海道社会福祉事業団）が閉園されました。

ごあいさつ

会長 野田 栄次

１月１日に石川県能登地方を震源とする大地震により犠牲となられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

宮城まり子学園長が令和２年３月に亡くなり、同年９月、ねむの木学園やさしいお家の施設長に就任しました。まだ間もない令和４年 11 月、大阪での施設長会議において会長を拝命いたしました。

今日まで日肢療連の施設長の皆様に支えていただく中で、「井の中の蛙」だったと痛感いたしました。それまで「大海」という世界を知る機会がございませんでした。日肢療連の活動は私の「俯瞰力を高めるための自己探究の場」となっております。

昨年７月には、日肢療連から「障害福祉サービス等報酬改定」のヒアリングに会長として参加させていただきました。そのほか、たくさんの貴重な機会を与えていただくなど、皆様には心から感謝しております。

“今思うこと”は「すべての子どもたちの居場所」です。与えられる物理的な空間だけでなく、子ども自身が自分の空間と思える場のことです。

能登地方の震災に遭った子どもたちに「オンライン空間」という協働もされているとのこと。こどもの居場所づくりが重要だと思うばかりです。

第23回日肢療連全国大会 山口大会を終えて

はなのうら
園長 岡村 育子

爆発的に拡大した新型コロナウイルス感染症は、未だに収束の兆しは見えないながらも5類感染症へ移行し、いよいよ本格的な「ウィズコロナ」時代が到来したようです。

本大会は、コロナ禍でみえたこと～これからの児童福祉～を大会テーマとし、利用者がコロナ禍以前の生活を「取り戻す」だけではなく、共生共存の時代に即した「自分らしい」生活を手にいれられるような支援を目指し、研究・協議することを目的として開催されました。

令和5年10月26日、日肢療連全5施設の代表が、菅原道真公を御祭神とする日本で最初に創建された天神様の地、防府市に久しぶりに参集しました。

開会式では、日本肢体不自由児療護施設連絡協議会表彰要綱第3条の規定に基づき、はなのうらから1名の保育士と1名の児童指導員が表彰されました。10年以上継続して勤務し、様々な障害特性や個性のある児童に寄り添いながら熱意を持って支援をしてきた二人です。園舎が移転した後は小規模グループ体制のもと、家庭的な環境の中での支援と個別化を目標とし、「その子らしさ」を大切にして利用児と真摯に向き合ってきました。この表彰が励みとなり、今後のさらなる活躍に繋がると十分期待しています。

続いて、こども家庭庁支援局障害児支援課移行支援専門官　岡﨑俊彦氏より、「良好な家庭的環境の提供と個別性の尊重」と題する基調講演をいただきました。

先ずは、こども家庭庁の組織概要からご説明をいただきました。最近の主な動向として、次元の異なる少子化対策の実現のため多様な支援ニーズへの対応としての「こども未来戦略方針」、多様なニーズを有するこどもの、地域の支援基盤の強化を図るとする「経済財政運営と改革の運営方針2023」、「こども家庭審議会」についてご説明を拝聴いたしました。

続く、障害児支援や障害児入所施設の動向については障害児入所施設運営指針をひもとき、権利擁護と安全対策の重要性とについての認識を新たにしました。小規模グループケアや、被虐待児の受入、各ライフステージにおける発達目標の達成と自立支援には、家族との協働、家族を含む包括的な支援と連携アプローチが必要であると学びました。

最後に障害児の権利擁護について岡﨑氏は、話せない子どもの気持ちになり、何でも伝えていく“マイク”となり子どもの声を届ける役を担うことがアドボケイトであり、アドボカシーの基本的な考え方であることをご教示くださいました。私たち日肢療連が常日頃から感じていることを確信したところです。

貴重な講演のあとは、第一分科会と第二分科会に分かれ熱いディスカッションが交わされました。

第一分科会は施設長5名と講演に引き続き岡﨑移行支援専門官に参加していただき、テーマごとに議論を行いました。岡﨑氏から、障害児入所施設に係る報酬・基準についてのお話をうかがった後、施設長からは、1 地域生活に向けた支援の充実　2 小規模化等による質の高い支援の提供の推進　3 支援ニーズの高い児への支援の充実　4 家族支援の充実と、4つの論点について確認をいたしました。

第二分科会では、「保護者の支援や連絡の取り方　信頼関係を構築するための配慮」「自傷行為や問題行動のある子への事例・支援方法・情報共有」をテーマにそれぞれのグループに分かれ、支援長や保育士、支援員が、常日頃自施設で取り組んでいることや、課題に思っていることなど忌憚のない意見交換が行われました。第一分科会は隣の部屋で行っていましたが、時に大きな笑い声が聞こえてくると、施設長一同が「盛り上がってますね～」と羨ましそうな顔をされていたのが印象的でした。

10月27日は華の浦・はなのうらの施設見学からスタートしました。平成29年5月に移転新築した施設を6年の時を経て皆さんに見ていただきました。ご参考になりましたでしょうか。

全国大会の最後は研究発表です。

太子学園は、【太子学園　家を「創る」】と題し、太子学園の現在の課題と「家を創る」ことのメリットについての発表がありました。

おぞらのいえは、【社会とのつながりと子どもたちの心の育ち　-with コロナになって気づいたこと】と題し、コロナ5類以降後の施設の状況についての検証があり、支援が子どもたちの自主性・主体性を育み、あるべき子どもの姿を観ることができたとの発表がありました。

精陽学園は、【1160 kmをつなぐ支援～遠く離れた親子の家庭復帰に向けた取り組み～】と題し、Y君の家庭復帰に向けた事例を発表され、全国大会後に長崎県へ退園後のY君親子に会いに行かれるというサプライズもありました。

どこの施設の発表も素晴らしく、自分ならどんな対応ができたであろう、自分の施設でもあるあるだな…と感じたのは私だけではないと思います。日肢療連会員一人一人が思いを同じ方向に定め、子どもたちの明るい未来に向かって邁進していくことを確信した大会であったと思います。今後も継続して全国大会が開催されることを御祈念しております。

「こどもの夢」

精陽学園
園長 市川　進治

先日、こどもからお手紙をもらいました。その内容は、「建物をすべて建てかえることはできますか？小さい子たちに、遊具などで楽しく遊べる場所を作ったり、一人ひとりのお部屋があったり、トイレやおふろも広くて入りやすい所だったりとか、一人ひとりにストレスのないようなきれいな精陽学園を作ってほしいです。」

精陽学園は、昭和58年4月に開所しましたので、ちょうど40周年になります。当時の設計ですから、多床室が中心で、一人ひとりが静かに過ごせるスペースはありません。途中で改修工事を行い個室も用意しましたが、感染症対応や短期入所等に使うので、限られた時間しか使えません。こどもの話を聞きながら、何回もうなずいてしまいました。「そうだね。その通りだね。一人になりたいときもあるよね。ストレスたまるよね。」

施設の建替えは、とても大きな問題です。建て替える場所、地域の理解、自己資金、国庫補助の認可、市街化調整区域や市の条例等による制限、建築期間、建て替え後の定員や事業のイメージ等、すぐに解決できるものではありません。そのほかにも、物価高騰や建築現場の人材不足も大きく影響を及ぼしています。こどもの夢は私たちの夢でもあります。実現に向かって、一歩一歩踏み出さなければなりません。「すぐには出来ないけど、気持ちはよくわかったよ。高校を卒業する前には、建て替えが出来ると嬉しいね。」と返すことが精一杯でした。

さて、日肢療連の今年度の活動は、とても充実していました。コロナ禍からの脱却を目指し、全6回の施設長会議の実施、令和6年度障害福祉サービス等報酬改定ヒアリングへの出席、久しぶりの全国大会及び三名の交換研修の実施、新しく児童発達管理責任者等情報交換会の実施、特に山口県で開催した全国大会では、こども家庭庁から岡﨑俊彦専門官を招き、ご講演をいただきました。様々な情報交換も行い、とても有意義な時間を持てました。更に今回の機関紙も発行することができました。

当協議会は、五つの施設でできている小さな団体です。その分、施設間の結束力はとても強く、いつも同じ気持ちで励まし合うことができます。開設時の思いを引き継ぎ、こども一人ひとりの幸せのために、力を合わせて頑張ります。

子ども会の挑戦～より良い生活のために

精陽学園
矢田部　茉唯

子ども達が主体的に話し合い、自分達で自分達の生活をより良くするため、精陽学園では、子ども会の活動を行っています。子ども達から、「困っていること」「もっとこうして欲しいこと」を表明し、学園全体で課題解決に向けて取り組む精陽学園の中でも重要な組織です。

子ども達の代表者が定期的に集まり、学園生活での困りごとや、学園に対する要望を話し合い、「子ども達からの要望書」を提出してもらいます。

ここ最近では、遊び場をもっと増やして欲しい、冬場の寝具をもっと暖かいものにして欲しいという生活面での要望や、「子ども達で職員さんの誕生日を祝いたい。みんなが精陽学園の一員なんだから」という心温まる子ども達からの意見が出されました。職員の誕生日を祝いたいという子ども会の思いは、職員の誕生日の調査、表の作成と掲示といった動きとなり、今では私たち職員も、誕生日には子ども達にお祝いをしてもらえるようになりました。そこには「精陽学園で生活しているからこそ」の悩みや課題、思いを自分たちの力で解決しようとする意思があります。

この取り組みには子ども達の主体性を高めるだけではなく、成功体験を通じて自信をつけて欲しいというねらいもあります。始めは会議で自分の意見を伝えることや、園のみんなのためにという気持ちを持つことが難しいことがありました。しかしこれまでの活動の結果、実現できて嬉しい気持ちと共に「みんなが笑顔になってくれて嬉しい」といった気持ちも生まれ、自分達の意見を聞いてもらえた経験は自信にも繋がっています。

いまはむかし

ねむの木学園
やさしいお家
園長 野田 栄次

今となっては昔のことになりますが、40年ほど前「保母資格」を取得したのち、保育園で少ない男性保育者の一人として一歳～三歳の統合保育クラスを受け持ちました。

平成11年以前、保育士は「保母」と呼ばれていました。児童福祉法の改正により「国家資格」と格付けされましたが、未だに大きな自治体と地方では格差があるようです。

昨今の報道で、子ども従事者による虐待において「保育士」の職種名でクローズアップされているのが気になります。子どもたちを性被害からも守る「日本語版DBS」「保育士特定登録取消者管理システム」にも使われています。

保育士は見た目よりずっと大変で、ずっと前から、今でいう家庭支援員としての機能も果たしてます。

例えば、「おむつはずしは保育園でしてくれたので、ありがたかった」など、よく言われたものです。

社会の多様化により、家庭内だけでの子育てが難しくなり、乳幼児期にきちんと愛着が築けないと、家庭が子どもたちの居場所でなくなることになってしまいます。

「障害児入所施設」等の調査で、入所前に家庭で虐待等を受けていた(疑い)子どもが、高い割合で存在しています。こどもたちの居場所は、一体どこにあるのでしょうか。

保育園に務め始めた頃の話ですが、次のような話を聞いたことを思い出します。それは保育の園庭や公園で子どもたちが遊んだ後、保育士に「せんせい、あそんでいい？」と聞いてくる。「あそび」という空間ではなかったのかもしれません。

私たちも昔こどもでした。こどもたちは「口に出せない」「口に出しちゃいけない」と思う判断もしている。

子どもたちが大人になった時、私たちと同じ空間で過ごした場がこどもたちにとっての「居場所」の一つであってほしいと願っています。

「大好きな歌を歌いたい」

ねむの木学園
やさしいお家 主任
保育士 田中 亜希子

ねむの木学園では音楽、美術、ダンスなど芸術活動に力を入れています。歌を歌う時は、まり子学園長が子ども達の前で指揮をとり、音楽の楽しさを教えてくれましたが、みんなが大好きな、まり子学園長が4年前に亡くなりました。

子ども達は歌を歌うと思い出し、心にぽっかりと穴が空いたような気持ちになりました。

そんな時に市の応援大使をしている海外の歌手でトランペット奏者の方が学園に来園されました。初めて見る海外の方、聞き慣れない英語に子どもたちは驚いていました。「アイシテイマスカ」と呼びかけられ、戸惑っていました。

しかし、初めて聞くトランペットの音色、リズム感の良い音楽にすぐに魅了されました。

その後も何度も来園され、子ども達はみんな大好きになり、来る日は玄関にお出迎えに行くようになりました。

去年の春にその歌手の方から「歌を練習して、レコーディングをしよう」と提案があり、デモテープをもらいました。子ども達は毎日聴いていて、練習をしました。歌詞は英語ですが、耳が良い子ども達はすぐに覚えて、歌っていました。歌を聴いていて、からだ全体で踊る子どももいました。

夏休みは一週間泊まり、子ども達と歌の練習をしてくれただけでなく、英語の勉強も教えてくれました。

去年の9月にレコーディングをしました。初めての子どももいて、とても貴重な経験が出来ました。

完成したCDをクリスマスの日にもらいました。子どもたちに再び歌う楽しさを思い出させてくれました。

春に「また来るね」という約束を楽しみにしています。

園には「アイシテイマスカ」「アイシテイマス！」と言う声が今日も響いています。

お出迎え

CD ジャケット

レコーディングスタジオ（忍野村）

「太子学園の新たな取り組み」

四天王寺太子学園
園長 成澤 佐知子

新型コロナウイルス感染が5類に移行し、様々なことが平常に戻りつつあります。

日肢療連の会誌も大変久しぶりの発行になるのだと思います。この間に、太子学園は50周年を迎えました。（令和4年5月）

「あの頃の太子学園」は、こどもたちの登校後、園庭には車いすが並んでいましたが、「今の太子学園」は自転車がずらっと並んでいます。現在では知的障害や発達障害の増加、肢体不自由児の減少が特徴となっています。

こどもたちの変化もあり、ここ数年の太子学園の課題は「意思表明」と「自己決定」であります。意思決定支援においては、こどもそれぞれの障がいの特性もあり個別性の高いところでありますが、その内容も支援方法も多様で判断の難しいことも多くあります。特に難しいところは社会との関わりの深いものですが、新たに取り組んだものに「アルバイト」があります。こどもからの申し出に、「我々職員もチャレンジ」という意気込みで始めたものです。なかなか合格がもらえず悩ましく思うこども、面接の練習を職員と行うこども、様々な経過を経て数人がアルバイトを始めました。「コミュニケーションの取り方が難しい」と言いながらも「楽しい」と言って継続して勤めています。一人はアルバイトのご縁でそちらに就職も決まりました。

次には、携帯電話の使用・所持です。IT・ICT機器の使用については、社会全体がオンラインツールでのやり取りを当たり前とし、手軽に情報伝達、共有が行える環境は便利ではありますが、犯罪とも密着しており使用に躊躇するところでありました。社会に出てから困ることのないよう今から取り組もう、という職員の意見もあり、実施いたします。

大阪では児童養護施設を中心に「アドボケイト」の導入が話題に上がることも増えてきました。太子学園の児童のための「意思表明」と「自己決定」の取り組みは、今後も継続して実施し、多くの「思い」を叶えられるようにしたいと思います。

「ぼくたち、太子町でボランティアはじめてみた」

四天王寺太子学園
辻中 秀吾

「なぁなぁー　ボランティアってなんなん？」

きっかけは、児童が小学校から持って帰ってきた太子町社会福祉協議会（以下社協）のボランティア参加案内のチラシを見て言った一言でした。

四天王寺太子学園自体は自然に囲まれた環境で、児童が伸び伸びと成長出来る環境にありますが、近隣に住居や商業施設があまりありません。

ボランティア活動を通して、学校・学園以外での仲間作り・生きがいを感じられるようになる・生活の視野を広げ、社会性を育むことが子どもたちの成長に繋がると考えボランティアに参加することとなりました。

参加に当たって社協と連携を取った結果、太子町高齢者対象の「配食サービスボランティア」に参加することになりました。

小学5年生3名で参加をし、3軒のお宅にお弁当を届ける為回らせていただきました。

アイスやお菓子を下さったお宅もあり、人々の温かさに、触れた気がしました。終了後、改めて子どもたちに感想を聞くと、「アイスがもらえるんやったら喜んでやるわ」「またボランティアに行きたい。」と言ってくれました。

ボランティア体験を通して、地域コミュニティの幅が少ない子どもたちにも、貴重な体験になったと思います。この活動を通じて、子どもたちと3月にテラスに訪問するという次の活動への繋がりを作ることも出来ました。今後も継続的に参加できるよう、学園内で働きかけていきたいです。

幼児期・学齢期からの職業教育

おおぞらのいえ
所長 木村　正明

おおぞらのいえ所長に着任して、まもなく一年が経とうとしています。初めての児童福祉の分野に携わり、日肢療連の施設長の皆様に多大なご指導をいただいています。また10月には全国大会に参加させていただいて、意見交換を行ったり、はなのうら様の施設を見学させていただき、現場の方の話も伺うことができ大変勉強になりました。ありがとうございました。

さて今年度、おおぞらのいえでは、「幼児期・学齢期からの職業教育」をテーマに、兵庫県内においてジョブコーチや障害者就業・生活支援センターで経験を豊富に積まれた内部の職員にお願いして、職場内研修を実施しました。講義を聴き、家庭（施設）でのしつけの大切さ、学校での教育、卒後の支援などの大切や重要性をあらためて感じました。講師の方の話で特に印象に残ったことは、「なぜ、働くことを目指すのか」について、「働くことは、生きていくことに大いに参考になる」ということ、施設での「気づいてあげる」から、社会では「困ったことを自身で伝える」が求められることでした。

児童の皆さんを社会に送り出していくことが施設の大きな役割です。今回の講義は、職員にとって長期的な視点をもって支援する、支援の幅を広げる契機になったのではないかと感じました。

児童発達支援管理責任者連絡会を開催して

おおぞらのいえ
療育指導課長
浅見　悦子

昨年11月26日にオンラインで「児童発達支援管理責任者連絡会」を開催しました。各施設から1～2名、計6名の児童発達支援管理責任者（以下、児発管）が参加しました。初顔合わせということで、アイスブレイクの「何をしているときが一番幸せ？」からはじめ、時間を追うごとに様々な意見が出てきました。本題では、後輩職員の指導・育成時に評価を行っていたり、1年間チューターがつく事業所があったこと、知的発達の児童を受け入れる中で、活発な児童であるがゆえの悩みや指導（性教育など）があることなどが印象的でした。特に性教育については、外部講師を招いての研修や模型を使用した児童への研修、地域移行前の児童への指導など、児童の将来に大きく影響を及ぼす可能性があるがゆえに熱心な事業所が多く、聞いていて身が引き締まる思いでした。

また、個別支援計画策定の議題では「言葉で表現できない思いを汲み取ってあげたい」、後輩育成の中での「見られてよい支援、行動を心がけている」ということを改めて言葉にしたり、聞くことで、支援に対する心がけを再認識する良い機会になりました。

児発管といえども支援現場に関わっている職員が多数で、児発管としての業務以外に追われる中、なかなか悩みを共有する場がないと思うので、同じ立場で話ができるということのありがたさを感じました。また、経験年数も様々で、そのタイミングで感じた気持ちや悩みを共有していくことで、互いに研鑽できるのではないかとも思いました。次年度は、対面で実施する機会が持てると、もっと距離も縮まるのではと思いました。

進路指導に関わって考えたこと

おおぞらのいえ
支援員 久保　京加

おおぞらいえに配属されて4年目となりました。これまで卒業生を3度見送ってきましたが、その度に児童の成長を感じます。今年度は措置児童の進路指導に関わって、その過程で感じたことを書かせていただきます。

前年から関係機関との会議を開き、情報共有の場を設けてきました。その課程で保護者や関係機関の意見相違が見られたり、保護者の健康面の変化などもあり、進路の方向性がなかなか決まりませんでした。担当者会議で関係機関から提示された進路は、保護者の方の「おおぞらのいえ退所後、自宅で一緒に暮らしたい」という意向だけが優先されていると感じられる内容でした。もう少し一緒に暮らすことのリスクなどを踏まえて検討していただきたいなと思う気持ちが正直ありました。その後も情報共有を何度も行い、検討を重ね、最終的には安全を確保した上で利用児童が楽しみながら生活できる環境を整えることができたと思います。

この度のことを通じて、改めて利用者本位の支援について考えさせられました。利用児童の安心安全よりも、周りの環境や保護者の意向で決定してしまうことで、利用児の将来が大きく左右されてしまうと思います。施設職員として意思表示が難しい児童の代弁者でありたいと思うと共に、今後も児童の意思を尊重し、児童を中心に考えた支援をしていきたいと強く感じました。

春はあけぼの

はなのうら
園長 岡村　育子

毎年この季節になるとこの言葉が頭をよぎります。夜が徐々に明けてゆくさま、徐々に白んでゆく山際のあたりがいくらか明るくなってゆくさまを想像するとき、何かいい事が起こりそうな春への期待感があふれ出てしまいます。（私の勝手な思い込みです）特に今年は、今まではチョット難しかったことができそうな気がする、去年よりも楽しいことが増えそうな予感に、ワクワクする自分がいます。

さて、はなのうらの子どもたちは、「今日のおやつは大好物のホットケーキ！」「明日はみんなで調理実習！何作ろうかな？」と、普段の生活の中でのささやかな楽しみを積み重ねています。これこそこども達のモチベーションに繋がることと信じ、職員は日夜「子どもたちがワクワクする楽しいこと」を模索しています。

四月になると進級する子、或いは入学する子、社会人になる子と、子どもたちは確実に一歩進んでいきます。私たち大人も、昨年再始動を果たした日肢療連が更に躍進するように、会員施設全員で盛り上げていきたいものです。

一年を通して

はなのうら
児童発達支援管理責任者
横田　倫子

ウイズコロナの生活になり一年近くなりましたが、行動制限はなくなりましたが、そうはいっても特効薬のないコロナ、一年中流行しているインフルエンザ、季節性の風邪など、感染症に関しては、子どもたちも職員も息つく暇も与えてもらえませんでした。そんな中でも、子どもたちの生活をどのようにして充実したものにしていくか、どのようにして「なりたい自分」を見つけてもらうか、子どもたちの傍にいる職員たちの悩みは尽きませんでした。

しかし、その悩みを吹っ飛ばすくらいに、子どもたちはどんどん成長していきました。幼稚園に通い始めた子。ピカピカの一年生になるために、総合支援学校の就学前教室にルンルンで通う子。地域移行するために長い実習をコツコツと頑張った高校生。そんな姿を見て「僕、高校生になったら○○で実習してみたい。」と話してくれる小学生。元気に生活してお家に帰りたいと話してくれる中学生。一人ひとりの尊い思いが見えやすくなった時であり、職員一人ひとりが子どもたちの思いに寄り添った一年でした。

令和六年度から報酬改定で、全ての施設入所児童に対して地域生活への意向について確認し、希望に応じたサービス利用になるようにしなければならないとなりました。

私たち職員は、子どもたち一人ひとりが発信する思いを、見つけ受け止め、子どもに気づいてもらい「なりたい自分」を見つけるための最強サポーターになるべく邁進していきます。

日肢療連交換研修について

四天王寺太子学園
坂野　博保

令和６年９月21日から25日の間、精陽学園　佐々木 美穂様、ねむの木学園　沢谷茉歩様、はなのうら中村　萌様の３名の方が太子学園に交換研修で来ていただきました。

研修参加者の方から多職種との連携や障害特性を踏まえた支援方法などを学びたい要望があり、心理士や児童発達管理責任者から説明する座学の時間を多くとらせていただきました。

３名の方が太子学園を選んでいただいて有り難い反面、３人を別々の日程で受け入れるとなると「対応業務が増えてしまう。これは困ったぞ。では一緒にやってしまえ」という浅慮から、「交換研修３人同時受け入れ」となりました。これが怪我の功名か災い転じて福となすになったのか、３人同時のメリットは多かったと思われます。３人が別施設であるため、違う視点での質問のやり取りが出来ること。お互いの施設の事を話すことで太子学園だけでは学べないこともあったと思われます。今後の交換研修の参考になれたら幸いです。

交換研修に参加して

精陽学園
佐々木　美穂

短大を卒業してすぐ精陽学園で働き始めて10年目、日肢療連の交換研修に参加してみるのはどうかと話を受けました。精陽学園以外の施設の事はあまり知らないまま年月が経ってしまっており他施設の様子を見て学んでみたいという気持ちが緊張と共に大きく、今回大阪の太子学園さんへの交換研修に参加させて頂きました。

研修中は、職員の皆さんや子ども達と関わらせて頂く中で精陽との違いや共通点を見つけていく事がとても楽しく思えました。同時に精陽が恋しくもなりました。他施設の方も同時期に研修を受けられていた為、更に多くの情報を得ることが出来てとても有意義なものでした。

緊張した４泊５日でしたが、この機会を頂けたおかげで「こんな事があった」「これは精陽で活かせる」と周りに話しつつ考えていく事が仕事へのモチベーションにも繋がりました。お忙しい中対応して下さった太子学園の皆様、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

交換研修を受けて

ねむの木学園星に祈る
生活支援員　沢谷　茉歩

今回、日肢療連の交換研修を受けて感銘を受けたことがいくつかあります。一つ目は、現代の日常生活の中では必要不可欠な存在になっているテレビやタブレットを使用することで、退屈によるトラブルが防げるということです。さらに、ルールを作ることで「順番を守る大切さ」「楽しいことそうではないことのメリハリ」等の力が自然と身に付くのは大切だと思いました。二つ目は、心理士さんが身近にいることで心理的なアプローチが出来るという事です。今回「はぐはぐ」という活動に参加させて頂きましたが、楽しみながらも様々な方向からのアプローチをしていて、改めて多職種連携の重要さを実感しました。相談することで解決するものも多くあるため、二次障害発生の防止にも繋がり、さらに人との繋がりが出来るのは社会でも重要なことだと思いました。上記以外にも今回の研修で学んだことは沢山ありますが、自分からなにかをするということや意思表示は生きていくうえで大切な事だと改めて感じました。

また、所属している施設ではないところの方の話しを聞くと違う点ばかりだったため、勉強になりました。

《お世話になりました!! 幸せます》

はなのうら
中村　萌

太子学園交換研修では、同じ肢体不自由児対象の施設ですが、はなのうらとの違いや「いいな」と感じる所をみることができました。車椅子の児童はおらず、発達障害の児童が多くを占めており、活発的で賑やかな雰囲気でした。「引き継ぎ方法や支援計画などについて知りたい」と大まかな目標を立てて挑みました。

・朝の引き継ぎの際にどの職員が主なのか、服薬はどの職員がするのかなど、細かく報告。
・計画書は１つの項目に絞られており、スモールステップで着実に目標にたどり着けるように設定。
・誰が勤務なのか、この時間には誰がどこにいるのかが分かるように表を用いて分かりやすくしている。
・児童１人に担当職員が複数人いることで交代勤務の中でも児童、職員の両方の心の安定に繋がる。１人の職員に拘ったりすることが減る、相談しやすい雰囲気。

との回答が印象的でした。

今回、１施設に３人(３施設)が集まり研修をしたので様々な施設ごとの取り組みも知ることが出来ました。

編集後記

つたない部分がございますが、次回はもっともっとゆとりをもって編集ができるように取り組みたいと思います。原稿をいただいた皆さま、ありがとうございました。

令和６年度は「静岡大会」です。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。